

11月23日(日) サムエル記第一10章1～6節

「主の霊があなたの上に激しく下り、あなたも彼らと一緒に預言して、新しい人に変えられます。」(6節)

1節でサムエルはサウルに油を注ぎます。その時に「主が、ご自分のゆずりの地と民を治める君主とするため、あなたに油を注がれたのではありませんか。」と、主ご自身が任職の油注ぎをもってサウルをイスラエルの王としてお立てになったことを明らかにします。

サウルは油注ぎによって王とされてもこれからどうしていいのか分からなかったはずですが。そのようなサウルにサムエルが2節から6節までで、サウルの身にこれから起こることを知らせます。私たちも、主の働きにあずかった時に、何をどうすればいいのか分からないことがあるかもしれません。そのような私たちに主ご自身が一つ一つ丁寧になすべきことを教えてください。ですから私たちは主が教えてくださったとおりに一つ一つ忠実になしていけばいいのです。主が、召された私たちに対して求めていることは、目を見張るような立派な働きではなく、忠実さです。そして、そのように主の働きにあずかった者たちにとっての大きな誘惑であり、危険となるものがあります。それは慣れです。私たちは、主に聞かなくても、主が教えてくださらなくても何でも自分でできると思い、実際に自分がこれまでやってきたとおりに行えばいいと思ってしまいます。しかし主の働きにおいては、常に謙遜に主に聞き、主が教えてくださったとおりにすべてのことをなすべきです。それが主への奉仕です。

6節に「主の霊があなたの上に激しく下り、あなたも彼らと一緒に預言して、新しい人に変えられます。」とありますが、主の霊は人をその働きにふさわしく整えてくださいます。ですから、新しい人に変えられることも、サウルが何か別人のようになるということよりも、王の働きにふさわしく整えられるということです。特に、預言をすることは王の働きとは関係ないのではないかと思われる方もあるかもしれませんが、主によって任職されるなら、その働きがどんな働きであっても主の霊により常にみことばを語り、みことばを通して主のみこころを知り、それを語るということにおいては、預言することも不必要なことではないでしょう。私たちにも、賜物としての御霊が与えられているのですから、御霊の働きによって新しい人に変えられることを、ともに切に願い求めましょう。

11月24日(月) サムエル記第一10章7～9節

「これらのしるしがあなたに起こったら、自分の力でできることをしなさい。神があなたとともにおられるのですから。」(7節)

ここまでサウルは摂理をもって導かれるとともに、ここでは「神があなたとともにおられるのですから」と言われています。つまり、これまでサウルは摂理によって導かれることにより一つ一つ神のみこころを知り、神のみこころを確認しながら歩んでいましたが、これからは主の霊を通して主がともにいる歩みをし、直接主と語り、直接主に聞き、そのようにして主と親しく交わる歩みを通して、主に導かれ、主のみこころを知るようになるのです。そして「自分の力でできることをしなさい。」と言われています。ここで言われていることの一つは、主は決してその人ができないことをさせようとはしないということです。王に任じられようとしている

サウルですが、王として彼の能力を超えるようなことを主は決してさせようとはされません。ですから、自分には無理だ、できないと思うようなことであっても、主の召しとして自分の力でできることをすればいいのです。もう一つが、自分の力でできることをただ忠実に行うということです。自分ができる以上のことをする必要はありません。そのために私たちが必要なことは、自分を知るということであり、自分の限界を知るということです。ですから、これ以上は自分の力を越えていると思えば、それは他の人にお願ひするとか、自分にはできないことをはっきりと告げるべきです。それと同時に、自分がなすべきことについては、主の霊が必ず私たちを整え、私たちに力を与えて、その働きを全うさせていただきます。ですから、謙遜に主の働きを全うできるための力を与えてくださるようにと祈るべきです。主は必ず助けてくださいますので、私たち一人一人は、自分の力でできることをさせていただきます。主がともにおられるのですから。

11月25日(火) サムエル記第一10章10~16節

「キシユの息子は、いったいどうしたのか。サウルも預言者の一人なのか。」(11節)

5、6節でサムエルが語ったとおりに、預言者の一団が彼らの方にやって来ると、神の霊がサウルの上に激しく下り、彼も彼らの間で預言しました。それを見た以前からサウルのことを知っている人たちは、「キシユの息子は、いったいどうしたのか。サウルも預言者の一人なのか」と言い、そこにいた別の一人も「彼らの父はだれだろう」と言います。これは、サウルの父親がだれか尋ねているということではなく、むしろだれによって彼は預言しているのか、だれのもとで預言することを学んだのかと言っているのだろうと思われまふ。つまり、サウル自身も9章21節で「私はベニヤミン人で、イスラエルの最も小さい部族の出ではありませんか。私の家族は、ベニヤミンの部族のどの家族よりも、取るに足りないものではありませんか。」と言っていますが、周りの人たちも、サウルの出自のことを考えて、彼を取るに足りない人間だと思っていたのでしょう。しかし、神はむしろそのように周りが小さい、取るに足りないと思われていた部族の出であるサウルを王に召そうとしたのです。人の視点と神の視点の違いをあらためて思わされますし、神は小さくて取るに足りないと思う者こそご自身の働きに召されることをおぼえたいと思わされます。

サウルは、自分のおじに雌ろばを捜しに言った時に、サムエルに会ったことは告げましたが、サムエルが語った王位のことについては、話しませんでした。ここには理由が書かれてありませんので分かりませんが、その時が来るまで待とうとしたのではないかと言う人もあります。ここでサウルは自分が話さなくとも、時が来れば自分が王になることで主がすべてを明らかにしてくださるとの考えもあったかもしれません。サウルはそれだけ謙遜な人物であったということなのでしょう。私たちは、主の選びを静かに、謙遜に受け入れられるような信仰の持ち主とさせていただきます。

11月26日(水) サムエル記第一10章17~19節

「しかし、あなたがたは今日、すべてのわざわいと苦しみからあなたがたを救ってくださる、あなたがたの神を退けて、『いや、私たちの上に王を立ててください』と言った。」(19節)

17節でサムエルはミツパで民を主のもとに集めます。サムエルが民を呼び集めた目的は、王の選出にあたり、それが主のみこころであることを確信させるため、そして人々の前で公正に王となる人物が決められたことを明らかにするためでした。最初にサムエルは主のことばを語りますが、まず主ご自身が出エジプトのみわざをなしたことを語ります。しかし、イスラエルの民が王を求めたことは、エジプトの苦しみから救い出してくださった主を退けるに等しいことを再び告げます。王を求めることは主のみこころにかなわないことは、ここでも明らかです。そのようにしてイスラエルの民は主に逆らい、主に背を向け、まさに神を退けるかたちで王を求めました。それでも主はイスラエルに王を与え、決してイスラエルの民を退けるようなことはなさいませんでした。これが主の恵みであり、あわれみです。主は、ご自分が選び、救いへと導かれた者を決して退けるようなことはなさらず、忍耐深く呼びかけながら、ご自分のもとに帰って来るのを待っていてくださるのです。

私たちの周りにも主を退けて、自分のほしいままに振る舞っているように見える人があるかもしれません。また、私たちも主の御前に罪を犯してしまうことがあるかもしれませんが、それでも主は忍耐をもって私たちが悔い改めて、主のみもとに帰るのを待ち続けてくださり、私たちが主のみもとに帰ったなら、私たちを赦して再び主との親しい交わりへと迎え入れてくださいます。主は、イスラエルの民をエジプトの奴隷生活から救われたように、主は私たちを罪の奴隷生活から救い出してくださったことをおぼえて、主を退けるのではなく、主に従う者でありたいと思わされます。

11月27日(木) サムエル記第一10章20～24節

「主は「見よ、彼は荷物の間に隠れている」と言われた。」(22節)

イスラエルの全部族、分団ごとに主の前に出てこれから王となる者が選び出されようとしています。まずは、その中からベニヤミン部族がくじで取り分けられました。そして、今度はその氏族ごとに近づかせますと、今度マテリの氏族がくじで取り分けられ、最後にキシユの息子であるサウルがくじで取り分けられました。人々は、王に選ばれたサウルを探しましたが、見つかりませんでしたので、主に尋ねると「見よ、彼は荷物の間に隠れている」と言われ、人々は彼を連れて来ました。

1節でのサムエルからの油注ぎにより、サウルは自分が王として召されたことを知っていました。ですから、くじで自分が王として取り分けられた時に出て来ればよかったのですが、なぜか荷物の間に隠れていたのです。その理由について学者たちはいろいろと説明を加えます。例えば、彼が恥ずかしがったのではないかと、彼は謙遜な人だったので、あえて人前に自分を見せるようなことは好まなかったのではないかと、言う人もあります。しかし、可能性としてはサウルは自分が王としてイスラエルを治めることや民の先頭に立ってペリシテ軍と戦うことに恐れをおぼえたのではないかと思われまます。私たちも主の働きに召された時にうれしい気持ちや期待とわくわく感があつたという方もあるかもしれませんが、将来に対する心配や恐れもあるのではと思われまます。しかし、その恐れの中にあつても私たちを支えるのは主の召しであり、主がともにいてくださるとの確信です。そして、主は召した者を最後まで決して見捨てる

ことなく導き続けてくださると私たちは信じて、主に従って歩む中で、その働きを全うさせていただくのです。主の御前で謙遜に祈ることにより、恐れを平安と確信に変えていただきましょう。

11月28日（金）サムエル記第一10章25～27節

「サムエルは民に王権の定めについて語り、それを文書に記して主の前に納めた。それから、サムエルは民をみな、それぞれ自分の家へ帰した。」（25節）

サムエルは民に王権の定めについて語り、それを文書に記して主の前に納めました。恐らくこれは申命記17章14～17節の王に関する定めではないかと思われませんが、そのような王についての戒めだけではなく、同じサムエル記第一8章11～18節の王政の否定的な面についても、民が決して忘れることがないよう文書として書き記されたのではないかと思われます。それから、サムエルは民をみな、自分の家へ帰しました。神が王を立てられたことで、「王様万歳」と大声で叫んだ民は、王が与えられたことを心から喜び満足したことでしょう。また、サウルもギブアの自分の家へ帰って行き、しばらくはこれまでどおりの生活が続きました。そして「神に心を動かされた勇者たちは、彼について行った。」とあります。勇者は政治的にも軍事的にも経済的にも力のある者たちです。主は、王となったサウルに対してこのようなかたちで必要な働き手を備えて、王としての働きが守られるように助けをくださいました。ですから、私たちも主に信頼して自分の与えられた務めを果していけばいいのです。しかし、その一方で、よこしまな者たちもいて、「こいつがどうしてわれわれを救えるのか」と言って軽蔑し、贈り物を持って来なかった」とあります。それに対して、サウルは黙っていました。サウルは正式に王とされたのですから、王としての権威をここで行使することができたはずですが、彼はそうはしませんでした。むしろ、すべてを主にゆだねて、主が自分を通して働くことで、彼を非難していた者たちの口をもふさがれると信じていたのでしょう。私たちも、周りに批判する人々のいる状況に置かれることがあるでしょう。それは人にとってはつらいものであり、何とかして分かってもらい、自分のことを理解してもらいたいと思うでしょう。しかし自分の力で何とかして人を説得しようとするよりも沈黙をもってすべてを主にゆだねて、主が分かせてくださる時を与えてくださることを信じましょう。

11月29日（土）サムエル記第一11章1～10節

「サウルがこれらのことばを聞いたとき、神の霊がサウルの上に激しく下った。彼の怒りは激しく燃え上がった。」（6節）

サウルが正式に王として立てられましたが、いきなりアンモン人との戦いに臨むこととなりました。ヨルダン川東岸にいたアンモン人ナハシュは、ヤベシュ・ギルアデに対して陣を敷きました。ヤベシュの人たちは、アンモンに仕えると言いましたが、ナハシュは右目をえぐり取ることでイスラエル全体に恥辱を負わせようと言います。そこでヤベシュの人々は、イスラエルに使者を遣わし、援軍を要請しました。使者はヨルダン川を渡り、サウルが住んでいたギブアに行き、ヨルダン川の状況を伝えると、民は声をあげて泣きました。ちょうどその時、サウル

が牛を追って畑から帰って来ました。王が畑仕事から帰って来るとは何ともこっけいな光景ですが、恐らくまだ王政としての国作りがきちんと整っていなかったのでしょう。サウルは、何事かと尋ね、ヤベシュの人々のことを聞くと、「神の霊がサウルの上に激しく下り、彼の怒りは激しく燃え上がり」ました。ここでのサウルの怒りはアンモン人に対するものです。特に、ご自分の民に敵対し、侮辱することは、まさに神に敵対し、神を侮辱するに等しいと考えたのでしょう。そして、一くびきの牛を切り分け、それをイスラエルの国中に送ったことは、出征拒否に対する警告の意味と考えられます。主の恐れが民に下り、彼らは一斉に出て来ました。集まって来たのはイスラエルの人々が30万人で、ユダの人々が3万人でした。そして、サウルは、ヤベシュ・ギルアデの人たちに、「明日、日が高くなるころ、あなたがたに救いがある」と使者を通して告げました。

これまでサウルは戦いに出たことがありませんでしたし、くじで王を決めようとしていた時には荷物の間に隠れていましたが、神の霊が激しく下ると、彼は恐れなくアンモン人との戦いに出ようとし、ギルアデの人たちに「あなたがたに救いがある」と約束するほど勝利を確信していました。神の霊は、まさに人を造り変えることがここからも分かりますが、ここでのサウルの確信は、主を信じる信仰から出たものであり、それは、神の霊から来たものです。私たちも内にある信仰の確信をもって歩むことを願うなら、神の霊に満たされた歩みをしなければなりません。そして私たちの内には、すでに聖霊が住んでいてくださいますから、その聖霊に満たされた歩みを私たちはするべきです。